報告二

西暦一五〇〇年前後の西南ドイツにおける人文主義者、政治と地域的アイデンティティ

皆川　卓

一　導入

「人文主義」はニートハンマーが一八〇八年に初めて使用した概念です。[1] それが中近世の歴史に実在したという歴史学の理解に沿って、あえて一言で表現するならば、古典古代の「復興」でしょう。それは文学や芸術、自然哲学など、アルスの観念が及ぶ範囲全てを含みますが、歴史叙述もその一つであったことは周知の通りです。伝統的歴史叙述は統治の単位となる集団の由緒を語り、その統治の正当性を証明する機能を持っていますから、古典古代を歴史のスタートと観念しているヨーロッパにおいて、人文主義が歴史叙述を介して、各政治的共同体の正当性を付与する役割を果たしたことも、いまさら繰り返すまでもありません。[2]

しかし「国民国家」を政治的共同体の単位とする一九世紀以降のヨーロッパでは、こうした人文主義の役割は、そうした「国民国家」に投影されるエスニックな集団、つまりナツィオ（natio）を単位とする政治的共同体についてのみ注目されてきました。[3] こうした例は、ルネサンスに限っても、ゲルマン人を自国民の祖先とするコンラート・ツェルティス（Conrad Celtis, 1459-1508）のドイツ、[4] ガリア人を自国民の祖先とするジャン・ルメール・ド・ベルジェ（Jean Lemaire de Belges, 1473-1524）のフランス、[5] サ

ルマト人を自国民の祖先とするマチェイ・ミェホヴィタ（Maciej Miechowita, 1457-1523）らのポーランド[6]、ゴート人を自国民の祖先とするニルス・ラグヴァルズソン（Nils Ragvaldsson, -1448）のスウェーデンなど[7]、枚挙に暇がありません。これに対して、地域的アイデンティティの形成に果たした人文主義の役割は、ともすれば等閑視されがちでした。地方学（Landeskunde）の一環として地域史（Regionalgeschichte）が発展したドイツですら、地方の政治や文化を個別に研究するばかりで、地域的アイデンティティの成立の際に果たした人文主義の役割について検討されるようになったのは、ここ三〇年ほどのことに過ぎません[8]。

一五世紀から一六世紀のヨーロッパは、いうまでもなく封建領主の割拠状態が徐々に克服され、国王なり議会なりを核とした権力の序列化が明確に進展した時代でした。最後まで主権の形成が達成されなかった神聖ローマ帝国ですら、一四九五年のヴォルムス永久帝国ラント平和令を境として、領邦連合の形で緩やかな権力の体系化が実現しています[9]。皇帝マクシミリアン一世によってウィーンに招聘されたツェルティスを筆頭に、歴史叙述によって近世ナツィオのアイデンティティ造りに貢献したいわゆる「人文主義者」たちは、宮廷都市の大学教授や聖職者、宮廷詩人など、ほとんど例外なくこの権力の体系化において、統合する側にいた人々でした。つまりナツィオのアイデンティティは、統治の単位としてのナツィオを作り上げようとする人文主義者のプロパガンダとしての側面を持っていたのです[10]。

その一方、地域的アイデンティティについては、未だに地方における習俗や方言、宗教などから論じられる傾向が続いています。こうした傾向は、政治権力が全て国民単位で統合され、地域的アイデンティティについては非政治的な文化の問題として捉えられるという、近代国民国家的な観念の縛りによるものではないでしょうか。前近代においては、政治権力は地方に分散していたのですから、地域的アイデンティティには地域的な政治の世界が反映されていてもおかしくありませんし[11]、ジャック・ヴェルジェの研究が示唆するとおり[12]、中世末以来の知的エリートは地方にも拡散して地方の政治を担っていたのですから、彼らが政治的意図を以て地域的アイデンティティを作り出すことは十分考えられるのです。

「地方学」の伝統を持つドイツの学界においては、こうした観点を視野に入れた研究がすでに一九八〇年代後半から散見されます。それはドイツの地域史に歴史記述研究や記憶史の影響が及び、地域的アイデンティティの構造的な分析が始まったからです。ここで取り上げる西南ドイツで

いえば、人文主義・大学史研究のディーター・メルテンスや、著作権問題の方で有名になってしまったクラウス・グラフらの業績が代表的です。[13]

しかしながら、これらの研究はA・D・スミスに提起されたエスニシティの歴史性の問題や、ノラの『記憶の場』に始まる記憶史などの当時の関心を反映して、ある地域における社会集団ごとの歴史・記憶の受容のプロセスにのみ目を向けています。[14] したがって人文主義者が地域的アイデンティティを作り出す政治的背景、つまり地域的アイデンティティの創造における人文主義者と政治の関係については、十分に注目しているとはいえません。地域的アイデンティティはその地域の人びとに広く共有されることを前提にしており、拡大のプロセスに関心が集まるのは当然のことです。しかし地域的アイデンティティ創造の政治的背景について人々の関心が低いのは、地域文化を非政治的なものと見る国民国家的な観念に制約されているからではないでしょうか。アイデンティティが政治的な意図の下で創造されることがむしろ当たり前になっている現在、アイデンティティを創造した人文主義者を取り巻く政治的状況を分析し、そこからその意図を探る必要は、ますます重要になっているでしょう。

そこでここでは西南ドイツの中でも、州としても領邦としても統一性を持たなかったために、地理的・文化的な地域的アイデンティティの典型と見なされているシュヴァーベンを例として、それまで貴族の共同体を意味していたシュヴァーベンという観念が、一定の空間に「生まれた」集団のアイデンティティへと変化する際に、一五〇〇年前後の人文主義者が果たした役割とその政治的背景を、簡単に紹介しようと思います。

二　シュヴァーベンにおける一五世紀後期以前の歴史理解と地域のイメージ

人文主義がシュヴァーベンの観念を形成するのに重要な役割を果たしたことは、一六世紀になるとはっきりします。最も印象的なのは、地域のかたち、つまり地理的なイメージです。近代国民国家においても、自国の地図は自国をイメージし、自国民集団の間でその領土的要求を正当化する上で重要な役割を果たしますが、一六世紀の人文主義者も地域についてそれと類似のことを行っています。シュヴァーベンの場合、一五七二年にウルム市の教育長であるダーフィト・ゼルツリン（David Seltzlin）が「シュヴァーベン・クライス地図」を作成してオランダで出版していますが、ここではシュヴァーベンが明確な境界を持つ地理的概

念として示され、地域のイメージがヴァーチャルな形で与えられています。[15] 歴史叙述についても同様です。一五九五年にテュービンゲン大学古典語教授であったマルティヌス・クルジウス（Martinus Crusius, 1526-1607）が記した『シュヴァーベン年代記』は、当時流行のトロイ起源論をSuevi、すなわちシュヴァーベン人に当てはめ、大ナツィオであるGermanus、すなわちゲルマン人に属する小ナツィオとして彼らを位置づけ、さらに中世のシュタウフェン朝の事績を古典悲劇のレトリックでドラマチックに描くことにより、人文主義者とコミュニケーションを持つエリートたちの地域的アイデンティティを高めることに寄与しました。[16] 一七世紀になると、この歴史観はギムナジウム教育などを通じて徐々に社会に拡大していきます。

しかし人文主義者が登場する一五世紀後期以前の神聖ローマ帝国では、事情は全く異なっていました。まず当時は帝国全体も含め、地域を地図の形で示すという発想が希薄で、あるのは神の創造した世界そのものを示す「世界図」だけでした。さらにそれよりも重要なのは、地域のアイデンティティの基礎となる歴史理解が中世的な「聖なるローマ」のパラダイムに強く拘束され、それと一体化していた点です。一三五九年、「建設公」のあだ名を持つハプスブルク家のオーストリア公ルドルフ四世（Rudolf IV, 1339-1365）は、国王に準ずる特権を持つ「大公」の称号を自称しました。皇帝カール四世（Karl IV, 1316-1378）はこれに対し、それを根拠付ける特許状の提示を要求し、ルドルフはローマのカエサルやネロを発給元とする偽の特許状を提出することでこれに答えます。パリで育ち、イタリアを訪れたことのある皇帝は、無論この特許状の真偽を疑い、ペトラルカ（Francesco Petrarca, 1304-1374）にこの特許状の鑑定を依頼します。ペトラルカは、これを提示したルドルフを大馬鹿者だという意見と共に、大特許状が偽書であると鑑定しましたが、それにも拘らずこの特許状は、真偽不明のまま皇帝フリードリヒ三世（Friedrich III, 1415-1493）の代になって、帝国法として正式に認められてしまいました。[17] このことは一般にルドルフの誇大妄想の表れとして理解されていますが、神聖ローマ帝国における世界年代記の伝統や、帝国諸侯の情報理解のレベルを考えれば、単なるプロパガンディストの誇大妄想として片付けられません。実証主義のルールに従うことが当然視されていたイタリア人文主義の歴史観から見れば言語道断なファンタジーであっても、帝国諸侯が古代ローマから引き継がれた権利というファンタジーの方を選択したという事実が重要なのです。これは彼らが実証的な知見よりも、彼らの世界観に由来する過去のイメージの方に強く拘束され

ていたことを示しています。

こうした歴史認識は、一五世紀後半になっても地域の文芸世界には色濃く残っていました。西南ドイツも例外ではありません。一四六〇年代以降にトマス・リーラーなる人物によって記された『シュヴァーベン年代記』は、そうした状態を良く示しています。[18] 高地ドイツ語で記された三〇ページ強のこの書物は、一〇四年にローマ皇帝となったクリオ（Kurio）なる架空の人物（史実ではトラヤスヌの治世）に始まる、一種の歴史物語です。クリオは妻や八人の息子たちと共に熱心なキリスト教徒となりますが、そのために帝位を狙う兄弟とローマ人によってローマを追われ、キリスト教信者の伯や騎士を引き連れて、「ドイツ人の地」（das teutsche land）に入ります。そしてウルムとライヒェナウの間の地を征服し、八人の息子と従者のために城や聖堂を築き、彼らをそこに封じます。それらの城や、その城の周りに生まれた都市の名が、地名の由来となりました。彼らはその地を元から支配していた異教徒のシュヴァーベン大公と戦い、これを追放して、彼らの中からキリスト教徒のシュヴァーベン大公を立てます。そして彼らの子孫や、クリオに従った従者たちの子孫が、それぞれ執筆当時のシュヴァーベンの有力貴族家門となっていく過程を、一種の叙事詩として展開しているのです。その中でも中心と位置づけられたのは、四番目の息子がウルムの聖堂を封建されて成立したブルグント総司教座です。ちなみに実際のウルムは、コンスタンツ司教区の一教区にすぎません。完全な創作と言っても良いこの記述のあり方は、創世記から書き起こす中世の世界年代記とは異なりますが、キリスト教的ローマを起源とする創作が、執筆地周辺の貴族や都市の由来として展開されていたことを物語っています。[19] ファンタジーの主人公はその地の貴族の先祖であり、シュヴァーベンは彼らが封じられた城や都市が点在する世界としてイメージされています。この話は、彼ら在地領主や都市貴族の集合的記憶として創作された「神話」と見るべきでしょう。リーラーの人物像は謎に包まれていますが、彼がハイデルベルクのアグリコラ（Rudolf Agricola, 1443/44-1485）やウィーンのツェルティスのように、このころ帝国中に現れ始めた人文主義者とは違い、キリスト教的ローマ皇帝に自らのパトロンの出自を求める中世的歴史観に留まっていたことは確かでしょう。[20]

この『年代記』はウルムで一四八二年から印刷業を始めたコンラート・ディンクムート（Konrad Dinkmut）によって、一四八六年に挿絵入りで出版されています。しかし彼の事業は利益を上げなかったようで、一四八八年の都市台帳では、彼が債務超過に陥っていると記録されています。

にもかかわらず彼は一四九九年にウルムを去るまで仕事を続けていますから、何らかの援助があったのでしょう。その活動時期と年代記の記述、当時のウルムやその周辺の政治状況を見渡せば、彼が年代記に登場するシュヴァーベン貴族と密接な関係を持っていたウルム市長ベッセラーらの援助を受けていたと推定されます。リーラーの手稿と出版資金をディンクムートに提供したのは、その姻族でウルムの参事会員であったハンス・ナイトハルトだったことが、両者の書簡から分かるからです。[21]

この年代記が出版された一四八五年ごろの政治情勢は、ウルムの都市貴族と周辺の領主貴族の親睦関係が強化され、一四八八年に両者を核とする「シュヴァーベン同盟」が成立する前夜でした。この狭い集団の結集を図るアイデンティティであれば、キリスト教ローマ皇帝を共通の始祖とするこのような作り話で十分だったでしょう。それによって擬制的な同族集団としての自己認識を持つことができるからです。しかし彼らの緩やかな安全保障団体として設立されたシュヴァーベン同盟は、その政治力と軍事力で、数年のうちに一円的な空間を支配する統治組織に変化しました。[22]そうなると伝説の皇帝やその従者の子孫に限らない、多様な統治者と被治者を包括するアイデンティティが必要となります。この新たな必要に文筆を以て応じたのが、ペトラルカ同様「実証的に」過去を捉えようとする新しいタイプの知識人でした。

三　「実証主義的」な古典復興と新しい地域理解

神聖ローマ帝国の人文主義は、バーゼル公会議派を抑える目的でエネア・シルヴィオ・ピッコローミニ（ピウス二世：Enea Silvia Piccolomini, 1405-1464）がウィーンの皇帝フリードリヒ三世の元に派遣された一四四三年以降に本格化します。彼による古典復興への刺激がどう関わったかについては良く分かりませんが、ウィーン宮廷から発給される文書で、一四七四年以降「ドイツ人の神聖ローマ帝国」（Das Heilige Römische Reich Deutscher Nation）という国号が使用されるようになったことは周知の通りです。[23]ただ一五〇〇年になってツェルティスの『ゲルマニア総鑑』（*Germania generalis*）が上梓されたように、ゲルマン諸部族に通じるエスニックな意味でのドイツ・ナツィオの登場までには、半世紀近くの空白があります。[24]その間に神聖ローマ帝国全体の統合より一足先に政治的な統合が図られた西南ドイツでも、「実証主義的」な古典の援用に基づいて「シュヴァーベン」のエスニシティを生み出し、宣伝する動きがいち早く出現しました。

一五世紀末の西南ドイツで人文主義の拠点となったのは、ハイデルベルク大学とテュービンゲン大学です。この二つの大学は、それぞれ対抗するプファルツ選帝侯とヴュルテンベルク伯（一四九五年以降公）を創設者としていました。前者が一四世紀からの古い大学であるのに対し、後者は一四七七年に創設された新しい大学であったため、当時の当主エバーハルト一世（Eberhald I, 1445-1496）の師で教会法学者のヨハネス・ナウクレルス（ハンス・フェルゲンハンス：Johannes Nauclerus, 1425-1510）が精力的に人材招聘および育成を行っていました。[25] 彼は一四五九年に教皇ピウス二世の十字軍招集の際に使節として派遣され、一四六六年まで教皇庁に留まり、一四七四年にはマントヴァ侯の娘バルバラを主君の妃に迎えてイタリアの帝国諸侯との関係を深めます。彼の関心は古典文化そのものではなく神学にあり、テュービンゲン大学では彼が招聘した神学者ガブリエル・ビール（Gabriel Biel, c.1410-1495）の下、「新しい敬虔」（Devotio moderna）運動を促しましたが、啓示に依存する神秘主義には傾倒せず、古典研究の実証的手法を用いた神学研究に熱心で、ラテン語典籍はもちろん、ギリシア語にも通じた神学および自由学科の学者を集めました。[26]

彼が招聘・育成した人文主義者を全て紹介するのは無理ですが、もっとも有名なのは、学位を取った直後の一四八一年、詩文およびローマ法教員としてテュービンゲン大学に招聘されたヨハネス・ロイヒリン（Johannes Reuchlin, 1455-1522）でしょう。彼は翌年ナウクレルスによってローマに派遣され、教皇シクストゥス六世（Sixtus VI, 1414-1484）からテュービンゲン大学の正式な認可を得ることに成功しています。ロイヒリンがフィレンツェを訪れ、ポリツィアーノ（Angelo Poliziano, 1454-1494）やフィチーノ（Marcilio Ficino, 1433-1499）の知遇を得たのもこの時でした。[27] 一四九六年にエバーハルト一世が没すると、彼は後継者に解任されますが、二年後に皇帝マクシミリアン一世、シュヴァーベン同盟、およびナウクレルスら人文主義者官僚による無血クーデタによってテュービンゲンに戻り、同地の教授としてラテン文学やプラトンを含むギリシア哲学、カバラを含むヘブライ文献学の研究を続けます。[28] 一方ナウクレルスが主導するヴュルテンベルクは、シュヴァーベン同盟への傾斜を強め、一五〇〇年にはナウクレルス自身が同盟に新設された同盟裁判所の裁判官を務めました。二年後に彼が七七歳の高齢で引退すると、あとを継いだのがロイヒリンです。[29] 彼はその時から同盟裁判官を辞める一五一二年までの一〇年間、年推定二〇～三〇件の訴訟の審査をこなす一方、詩学教授のハインリ

ヒ・ベーベル（Heinrich Bebel, 1473-1518）やその弟子で歴史叙述家のミヒャエル・ケヒリン（Michael Köchlin, 1478-1512）と定期的に政治談義を行う会合を持ちました。ケヒリンは、ここにツェルティスやヴィンプフェリンク、ポイティンガーなども顔を見せたと証言しています。[30] この政治談義の記録は残っていませんが、この談義で生まれた話題をもとに、おそらく多忙なロイヒリンに代わって、一五〇九年にラテン語の論文『シュヴァーベン賛歌縮図』（*Epistome laudum suevorum*）を出版し、シュヴァーベンのアイデンティティの発展に影響を与えたのがベーベルでした。[31]

ベーベルはシュヴァーベンの帝国騎士領の農民の生まれで、ウルム近くの教会学校を経て、いかなる経緯か不明ながら、一四九二年から九五年までポーランドのクラクフ大学で自由学科の講座を担当するラウレンティウス・コルヴィヌス（Laurentius Corvinus, 1465-1527）のもとで学んでいます（この時コペルニクスも同じ講座に属していました）。ついで一四九五年から一年間、『愚者の船』を出版したばかりのバーゼルの詩学教授ゼバスティアン・ブラント（Sebastian Brant, 1458-1521）の下に移り、一四九六年にテュービンゲン大学の詩学教授に迎えられます。その後彼はキケロ、ホラティス、ヴェルギリウス、クイントゥス・クルティウス、リヴィウス、セネカらの著作を研究しながら、『重要書簡覚書』（*Commentaria epistolarum conficiendarum*）、『学生用最善学習劇』（*Comoedia de optimo studio scholasticorum*）など多くの教育用テキストを執筆し、その傍らでロイヒリンの政治サークルの重要メンバーになったわけです。[32]

『シュヴァーベン賛歌縮図』の表題は「賛歌」とはなっていますが、内容的には論文であり、献呈先はテュービンゲン大学を領するヴュルテンベルク公の厩舎長になっています。当時のヴュルテンベルク公ウルリヒはロイヒリンが裁判官となっていたシュヴァーベン同盟に属していましたが、[33]『賛歌』上梓の一五〇九年には同盟が彼の政治的行動を制約するのに不満を示し、シュヴァーベン同盟と密接な関係を持つ人文主義官僚との間に亀裂が生じ始めていました。そこでそれを修復する必要が背景にあったと思われます。

『賛歌』の冒頭で、彼は我々の父祖（nobis maiores）であるスウェウィ人（suevi, natio suevorum）をはじめ、ゲルマン人（germani, natio germanorum）が古い時代には自分たちの立場を語る文筆家を持たなかったことを指摘し、ローマ人の著述に頼らなければならないことを認めたうえで、彼らはゲルマン人と対立していたので、事実を

ねじまげ嘘を書いたかもしれないと注意を促します。その上でカエサル、フラウィウス・ヨセフス、ティトゥス・リヴィウス、スエトニウス、タキトゥス、オロシウス、聖ヒエロニムスらのラテン文学の中から、スウェウィ人に関する叙述を拾い出し、その比較によって彼らが何者であるのかを明らかにしようとします[34]。

まずスウェウィ人と、ヒエロニムスの『ヒラリオン伝』でザクセン人とフランク人の間に位置するアレマン人を、その比定地から同じ集団であろうと推定し、両者を同じ部族（ゲンス）とします。これはこの地域の人々をアレマンとする中世の年代記、特に八世紀の『アレマン年代記』を念頭に置いています。そしてセネカの『ヒスパニア紀行』に「スウェウィ人が他のゲルマン人よりも高貴」とされている点、タキトゥスの『ゲルマニア』の中で「ゲルマン人に限らず、すべてのナツィオの中で最も勇敢」であり、特にユリウス＝クラウディウス朝からフラヴィウス朝の交代期における動乱において大活躍し、「スウェウィ人が全ゲルマン人の中で最も偉大であり、信義と徳において優っていると断言できる」とある点を挙げます。さらにはカエサルやプルタルコス、オロシウスもその著作でスウェウィ人をゲルマン人の内で最も好戦的な部族であると証言した（testatur）、と述べています。一方スエトニウスは同じ時代を記述しても、スウェウィ人の評価をしていない点もあげ、これは彼がスウェウィ人の支持を受けたウィテリウスと戦ったオトー側の人間であったからだろうと推定しました。そしてローマ時代の後、このスウェウィ人がカール大帝の忠実な友として仕え、さらにはその中からシュタウフェン王朝が現れてローマおよびイェルサレムの統治者となったことを指摘して、こうした勇敢で徳の高い資質を「我々の父祖は、多くの者の血と、栄えある功績によって、伝来の権利の中に残した」としたのです[35]。

この『賛歌』の特徴として挙げられるのは、第一にベーベルが古代のスウェウィ人をナツィオ、つまり抽象的な出生集団と捉え、「我々の父祖」、つまり自分も含む同時代のシュヴァーベン人の先祖として同一視しているという点です。この認識が近世以降のゲルマン人の解釈と同じパターンであることは、言うまでもありません。もちろん古代のナツィオを単純に現代のネーションの祖先と考えるのはナンセンスですが、それは近代民族学の成果を前提にした議論です。古典の解釈しか過去の解明方法がない当時、スウェウィ人は農民出身のベーベルにとっても「我々の父祖」でした。シュヴァーベン同盟の最初の企画者であったウルム周辺の領主しか問題にしないリーラーの『年代記』の理解に比べ、それが格段に広い範囲の人々を想定しているこ

とは明らかです。それを同盟に投影すれば、もともとの構成者である出生貴族や都市貴族だけではなく、同盟を運営するロイヒリンのような官僚やその周辺で彼らを支えるベーベルたち一般の人文主義者、更には都市を動かすギルド出身の参事委員まで、シュヴァーベン生まれの人々が広くそこに入ってきます。そこには身分に代えて出生地という新しい同化と排除の論理が見て取れます。

また『賛歌』ではスウェウィ人が常にゲルマン人というより大きなナツィオの一部として論じられている点にも注目すべきです。これは明らかにこの九年前の一五〇〇年にツェルティスによって出版された『ゲルマニア総鑑』にある、ドイツ人の始祖としてのゲルマン人の位置づけを反映しています。ベーベルはローマ時代のゲルマン人の中で、特にスウェウィ人を顕彰することにより、「ドイツ人の神聖ローマ帝国」の部分的ナツィオとして、自分たちシュヴァーベン人の優位性を論証しようとしているわけです。そこに彼らがナツィオを称しながら、帝国の一地域のアイデンティティに収まった理由が見て取れます。

最後にリーラーの『年代記』とは反対に、こちらは古典文学を題材にした実証的な態度が明瞭で、それぞれの記述を比較しながら、スウェウィ人の美質を論証しようとしている点です。確かにベーベルの「証言」はテキストの文脈から切り離されており、スウェウィ人を美化するように再構成されています。ギンズブルクの『歴史・レトリック・立証』によるまでもなく、聖書の章句を切り離して自由に訓戒を構築する手法は、教会では日常茶飯事でした。[36]その意味で彼の論証は、前近代の目的合理的なレトリックの特徴を引き継いでいます。しかしそれにもかかわらず、リーラーの『年代記』のように所与の目的のため完全に過去を創作するのではなく、古典文学を広く収集して文献的に知り得る証言を集め、記録者の立場にも配慮することで、読者に対する説得力を確保しようとしています。つまり複数のテキストからの情報を批判的に論証する人文主義者の「実証主義的」な態度に沿っているのです。

この方法は、実は彼を取り巻く政治の上でも重要な問題になっていました。ベーベルの同志であったロイヒリンが務めたシュヴァーベン同盟の裁判所は、学識法、つまりローマ法とカノン法からの論証によって判決を下す有給常駐の裁判所で、それが設立される一五〇〇年までの紛争解決方法とは全く異なっていました。[37]一五〇〇年以前のそれは、基本的に仲裁による和解で、事実関係を踏まえ、普遍的規範に照らして正邪を決定するのではなく、紛争当事者の利害や体面を配慮して示された妥協で決定されていたのです。このような和解方法は、密接な親睦関係にある狭い

領主層仲間の間では有効ですが、こうした親睦関係がない人々には通用しません。そうした人々を従わせるには、事実を実証し、事実への責任感に基づいて当事者を納得させることが必要であり、同盟裁判所はそうした新制度として生まれたのです。[38] ロイヒリンはこれをローマ的な統治として誇り、その職に自分も含め三人が就いていることから、「シュヴァーベンの三頭政治」（triumviri Sueviae）と自称しています。[39] しかし同盟構成員の間にはこうした統治に対する強い反発があり、狭い親睦の中で馴れ合っていこうとする彼らと、法の実証によって統治しようとする同盟裁判所との間で軋轢が生じていました。[40] こうした状況に直面したロイヒリンらの間で、古くからのコネの代わりに、古典文学からの実証によってシュヴァーベン人のアイデンティティを構築し、その共有によって同盟構成員を統率するアイディアが生じたことは、十分推定可能です。

このプロパガンダが直接の目的、つまり身分を超えたシュヴァーベン人アイデンティティを確立し、同盟の安定した統治を達成したかと言えば、答えは否です。彼らの主君のヴュルテンベルク公は、自由な諸侯という身分的アイデンティティに支配され、自らを統治しようとする同盟を脱退し、ロイヒリンは同盟裁判所を去りました。[41] やがて到来した宗教改革は、他の同盟構成員も宗派的アイデンティティによって引き裂き、同盟はそれによって崩壊します。[42] しかし地域の領邦君主の連合体である帝国クライスが同盟の権力を引き継ぎました。一八〇三年まで続くその長い統治の下で、この地方の人文主義者たちは「実証的」手法によって冒頭に述べたような地図や歴史叙述、表象を生み出し、シュヴァーベン・アイデンティティを作り続けていったのです。[43]

四　まとめ

以上のことから、領邦が乱立し、一見政治的な統一などないように見える中近世移行期の西南ドイツに生じた地域的アイデンティティも、決してその地域の文化から自然発生的に生じたものではないことが分かります。アンダーソンが近代のネーションの発生について、ジャーナリズムの役割からそれを論証したように、その時代の地域・政治の発展に基づき、変化に応える新しい能力を持ったプロデューサー、つまり人文主義者の政治的意思によって作り上げられたのです。

註

（1）Friedrich I. Niethammer, *Der Streit des Philanthropinismus und Humanismus in der Theorie des Erziehungs=Unterrichts unserer Zeit*, Jena, 1808.

（2）例えば、John Pocock, *Machiavellian Moment. Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton University Press, 1975［ジョン・ポーコック〔田中秀夫・柴田敬・森岡邦彦訳〕『マキャヴェリアン・モーメント：フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』名古屋大学出版会、二〇〇八年］.

（3）Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*, Oxford, Basil-Blackwell, 1986［アントニー・D・スミス〔巣山靖司・高城和義他訳〕『ネイションとエスニシティ：歴史社会学考察』名古屋大学出版会、一九九九年］.

（4）Gernot M. Müller (ed.), *Die "Germania Generalis" des Conrad Celtis*, Berlin, De Gruyter, 2001, Cf. Christopher B. Krebs, *Negotiatio Germaniae. Tacitus' Germania und Enea Silvio Piccolomini, Giannantonio Campano, Conrad Zeltis und Heinrich Bebel*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 2005.

（5）Jacques Abelard, *Les illustrations de Gaules et singularitez de Troye de Jean Lemaire de Belges*, Genéve, Libraire Droz, 1976.

（6）Christabel Donatienne Ruby (ed.), *Maciej Miechowita, Renaissance in Poland, Jagiellonian University, Sigmund I the Old, Kraków, Jan Dlgosz, Sarmatism*, Warsawa, Fidel, 2011.

（7）Hans Aili, Olle Ferm, and Helmer Gustavson (eds.), *Röster från svensk medeltid*, Stockholm, Natur och Kultur, 1991, pp. 286-299.

（8）Franz Brendle, Dieter Mertens, Anton Schindling, and Walter Ziegler (eds.), *Deutsche Landesgeschichtsschreibung im Zeichen des Humanismus*, Stuttgart, Kohlhammer, 2001.

（9）Heinz Angermeier, *Reichsreform 1410-1555*, München, C. H. Beck,1966; Joachim Whaley, *German and the Holy Roman Empire. From Maximilian I to the Peace of Westphalia 1493-1648*, Oxford, Oxford University Press, 2013.

（10）一般的には、Klaus Garber (ed.), *Nation und Literatur im Europa der Frühen Neuzeit*, Berlin, De Gruyter, 1989. イングランドに関して、Andrew Hadfield, *Literature, Politics and National Identity. Reformation to Renaissance*, Cambridge, Cambridge University Press, 1994; フランスに関して、Nicholas Mann, "Humanisme et patriotisme en France au XVe siècle", *Cahiers de l'Association international des études françaises*, 23(1971), pp. 51-66; ドイツに関して、Wolfgang Hardtwig, "Vom Elitebewußtsein zur Massenbewegung. Frühformen des Nationalismus in Deutschland 1500 – 1840", in ibid., *Nationalismus und Bürgerkultur in Deutschland 1500 - 1914*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1994, pp. 34-54; Georg Schmidt (ed.), *Föderative Nation. Deutschlandkonzepte von der Reformation bis zum Ersten Weltkrieg*, München, Oldenbourg, 2000 などを参照。

（11）Willem P. Blockmans, “Regionale Identität und staatliche Integration in den Niederlanden 13.-16. Jahrhundert,” in Antoni Czacharowski (ed.), *Nationale, ethnische Minderheiten und regionale Identitäten in Mittelalter und Neuzeit*, Torún, Wydawn. Uniw. Mikolaja Kopernika, 1994, pp. 137-149; Andreas Rüther, *Region und Identität. Schlesien und das Reich im späten Mittelalter*, Köln / Weimar / Wien, Böhlau, 2010.

（12）Jacques Vérger, *Les gens de savoir dans l'Europe de la fin du Moyen Âge*, Paris, Presses Universitaires de France, 1997［ジャック・ヴェルジェ〔野口洋二訳〕『ヨーロッパ中世末期の学識者』創文社、二〇〇五年］.

（13）Dieter Mertens, ““Landesbewußtsein” am Oberrhein zur Zeit des Humanismus,” in Franz Quarthal, and Gerhard Faix (eds.), *Die Habsburger im deutschen Südwesten. Neue Forschungen zur Geschichte Vorderösterreichs*, Stuttgart, Jan Thorbecke, 2000, pp. 199-216; Klaus Graf, “Das “Land” Schwaben im späten Mittelalter,” in Peter Moraw (ed.), *Regionale Identität und soziale Gruppen im deutschen Mittelalter*, ZHF Suppliment 14, Berlin, 1992, pp. 127-164.

（14）Pierre Nora, *Les lieux de mémoire*, tome 2, Paris, Galliard, 1986［ピエール・ノラ〔谷川稔監訳〕『記憶の場』三巻、岩波書店、二〇〇二―〇三年］.

（15）David Seltzlin, *Karte des Schwäbischen Kreises*, Ulm, 1572 / 75.

（16）Johann Jacob Moser (ed.), *Martini Crusii…Schwäbische Chronik, Martin Crusii, Weyland Hochberühmten Professoris der Griechisch- und Lateinischen Sprache, so dann der Wohlredenheit bey der Universität zu Tübingen Schwäbische Chronick: worinnen zu finden ist, was sich von Erschaffung der Welt an biß auf das Jahr 1596 in Schwaben, denen benachbarten Gegenden, auch vieler anderer Orten zugetragen …; aus dem Lateinischen erstmals übersetzt, und mit einer Continuation vom Jahr 1596 biß 1733*, Frankfurt am Main, 1733.

（17）Peter Moraw, “Das Privilegium maius und die Reichsverfassung,” in *Fälschungen im Mittelalter. Internationaler Kongreß der Monumenta Germaniae Historica, München 1986. Bd. 3: Diplomatische Fälschungen*, Hannover, Hahnsche Buchhandlug, 1988, pp. 201-224; Günther Hödl, “Die Bestätigung und Erweiterung der österreichischen Freiheitsbriefe durch Kaiser Friedrich III,” in *Fälschungen im Mittelalter*, vol. 3, pp. 225-226.

（18）Thomas Lirer, *Schwäbische Chronik*, Ulm, 1486 (reprint Leipzig, 1990).

（19）Peter Johanek, “Weltchronik und regionale Geschichtsschreibung im Spätmittelalter,” in Hans Patze (ed.), *Geschichtesschreibung und Geschichtsbewusstsein im späten Mittelalter*, Sigmaringen , Jan Thorbecke, 1987, pp. 287-330.

（20）Martin Gosman, Alasdair J.Macdonald, and Aria J. Vanderjagt (eds.), *Prince and Princely Culture 1450-1650*, vol.1, Leiden, Brill, 2003, pp. 285-287.

（21）Konrad Dieterich Hassler, *Die Buchdruckergeschichte Ulms*, Ulm, 1840, pp. 119-128; Peter Amelung, “Humanisten als Mitarbeiter der Drucker am Beispiel des Ulmer Frühdrucks,” in; Fritz Krafft and Dieter Wuttke (eds.), *Das Verhältnis der Humanisten zum Buch*, Bonn / Bad Godesberg, Boldt, 1977, pp. 129-144.

（22）Horst Carl, *Der Schwäbische Bund 1488-1534*, Leinfelden-Echterdingen, DRW-Verlag, 2000, pp. 55-60.

（23）Joachim Ehlers, *Die Entstehung des Deutschen Reiches*, 4.ed., München, Oldenbourg, 2012, p. 97.

（24）Gernot M. Müller (ed.), *Die “Germania generalis” des Conrad Celtis*, Berlin, De Gruyter, 2001(reprint 2012).

（25）Dieter Mertens, “Eberhard im Bart als Stifter der Universität Tübingen,” in Sönke Lorenz a.o. (eds.), *Attempto - oder wie stiftet man eine Universität. Die Universitätsgründungen der sogenannten zweiten Gründungswelle im Vergleich*, Stuttgart, Steiner, 1999, pp. 157-173.

（26）Karl Konrad Finke, “Johannes Vergenhans alias Nauclerus (1425 bis 1510),” in: ibid. (ed.), *Die Professoren der Tübinger Juristenfakultät (1477-1535)*, Ostfildern, Jan Thorbecke, pp. 322-343.

（27）Gerald Dörner, “Reuchlin, Johannes,” in Franz J. Worstbrock (ed.), *Deutscher Humanismus 1480-1520, Verfasserlexikon*, vol. 2, Berlin, De Gruyter, 2011, pp. 579-633.

（28）Sönke Lorenz, “Johannes Reuchlin und die Universität Tübingen,” *Zeitschrift für Württembergische Landesgeschichte*, 68(2009), pp. 139-155.

（29）Carl, *Der Schwäbische Bund*, pp. 393-394.

（30）Ibid., pp. 400-401; Mertens, “Michael Coccinius (Köchlin) aus Tübingen zwischen Universität und großer Politik,” in Sönke Lorenz, and Volker Schäfer (eds.), *Tubingensia. Impulse zur Stadt- und Universitätsgeschichte*, Ostfildern, Jan Thorbecke, 2008, pp. 165-185.

（31）Heinrich Bebel, *Epitome laudum Suevorum atque principis nostris Udalrici*, Pforzheim, 1509 (Bayerische Staatsbibliothek, Digitale Bibliothek, Res4/Germ.g.40 w#Biebd.4, urn:nbn:de:bvb:12-bsb00004360-2 VD16 B1303).

（32）Dieter Mertens, “Bebelius…patriam Sueviam…restituit”. Der poeta laureatus zwischen Reich und Territorium,” *Zeitschrift für württembergische Landesgeschichte*, 42(1983), pp. 145-173; ibid., “Bebel, Heinrich,” in Franz J. Worstbrock (ed.), *Deutscher Humanismus 1480-1520. Verfasserlexikon*, vol. 1, Berlin, De Gruyter, 2005, pp. 142-163; Klaus Graf, “Heinrich Bebel (1472-1518). Wider ein barbarisches Latein,” in Paul G.Schimidt (ed.), *Humanismus im deutschen Südwesten. Biographische Profile*, Sigmaringen, Jan Thorbecke, 2000, pp. 179-194.

（33）Volker Press, “Herzog Ulrich von Württemberg (1498-1550),” in Franz Brendle, and Anton Schindling (eds.), *Adel im Alten Reich. Gessamelte Vorträge und Aufsätze*, Tübingen, Bibliotheca Academica, pp. 72-74.

（34）Bebel, *Epitome laudum Suevorum*, folio. 6.

（35）Ibid., folio 7-18.
（36）Carlo Ginzburg, *History, Rhetoric and Proof. The Menachem Stern Lectures in History*, Boston, Brandeis University Press, 1999, pp. 54-70［カルロ・ギンズブルク〔上村忠男訳〕『歴史・レトリック・立証』みすず書房、二〇〇一年］.
（37）Carl, *Der Schwäbische Bund*, pp. 380-386.
（38）Ibid., pp. 376-378.
（39）Carl, “Triumviri Sueviae, Reuchlin als Bundesrichter,” “in Stefan Rhein (ed.), *Reuchlin und die politischen Kräfte seiner Zeit*, Sigmaringen, Jan Thorbecke, 1998, pp. 65-86.
（40）Carl, *Der Schwäbische Bund*, pp. 402-414.
（41）Carl, *Triumviri Sueviae*, pp. 79-84.
（42）Carl, *Der Schwäbische Bund*, pp. 19-20, and 169-179.
（43）Moser, *Martini Crusii…Schwäbische Chronik*; Volker Pfeiffer, *Die Geschichtsschreibung der Reichsstadt Ulm von der Reformation bis zum Untergang des Alten Reiches*, Stuttgart, Kohlhammer, 1981, pp. 73-77; Graf, “Die “Schwäbische Nation” in der frühen Neuzeit. Eine Skizze,” *Zeitschrift für württembergische Landesgeschichte*, 59 (2000), pp. 57-69.

（山梨大学総合研究部教育学域教授）